

B アメリカザリガニ



ウシガエルのえさに用い 移入された

アメリカザリガニは、1929年にウシガエルのえさとするためにアメリカ合衆国から神奈川県に移入・養殖されるようになりました。養殖場から逃げだしたものが分布を広げ、ペットとして飼育されるようになり、さらに分布が広がり、20世紀の終わりにはほぼ全国に定着しました。

祭りや縁日などで売られたことも分布が広がった原因のひとつです。水田や用水路、湿地や湖などにすんでいて、水草や水生動物などを食べます。ペットや学習教材としても飼われている、とても身近な生物です。



アメリカザリガニ (十脚目アメリカザリガニ科)

Procambarus clarkii

●体長15cm ●アメリカ合衆国南部 ●沖縄をふくむ日本全土・中国、東南アジア、アジア西部、アフリカ、メキシコ、中央アメリカ、西インド諸島、南アメリカ ●緊急対策外来種 ●外国では食材としてつかわれている ★淡水の小動物などを捕食し、イネや水草を食いあらす。ザリガニカビ病を媒介し、ニホンザリガニに影響。



なぜ害が出る 水のよごれに強く何でも食べる

アメリカザリガニは、よごれた水や高温水に強く、雑食で何でもよく食べます。また、水草やイネなどをひきぬいて、自分がくらしやすい環境をつくりまします。そのため、在来の生物をつかまえて食べたり、水辺の環境をかえて在来の生物のすみ場所をうばいます。また、ザリガニカビ病を広めニホンザリガニを減少させる危険もあります。

水田ではイネをさはりて切りたおして根を食いあらしたり、あぜに穴をあけたりするのできられています。原産地では食用にされていますが、日本ではペットや釣りエサ以外にはほとんど利用されません。

外来生物を防除すると、アメリカザリガニが増える？

ある環境の生態系を取り戻すため、かいぼり(114ページ)などによって、外来生物をたくさん防除すると、アメリカザリガニが爆発的に増えることがあります。それまで、アメリカザリガニを食べていた外来生物を取り除いた結果、天敵が少なくなり、泥の中で生き残ったアメリカザリガニが、天敵がいなくなった環境で爆発的に増えるのです。かいぼりの後はアメリカザリガニとの闘いが待っているわけです。

いろいろな在来生物が食べられてしまうことも問題ですし、水草が食べられてしまうのも大きな問題です。水草がなくなってしまうと、在来生物のすみかが減り、水が汚れる原因となります。

しかも、アメリカザリガニは水のよごれに強く、陸上を移動することができうえに、土の中にもぐって、寒さや乾燥から身を守ることもできます。また、アメリカザリガニの好む浅い水域では、大型の魚などの天敵が少なく、アメリカザリガニばかりがふえてしまい、種の多様性(→p7)が低くなっていることも多いのです。



水ぬきしてとらえる

アメリカザリガニは、冬は水辺の土中にもぐって越冬し、寿命が数年あります。完全な駆除はむずかしい状況ですが、越冬前に水ぬきなどをしてつかまえたり、生息場所にかご網をしかけてつかまえることで、数をへらすことができます。

ペットとして飼育しているものを野外に放さないように、十分に注意することもたいせつです。

小さい池にいるものはつかまえる、かくれ家となる空きカンやビニールぶくろなどのごみをなくすなどの方法で被害を防げます。また、日本のザリガニと思いきっている人も多いので、生態系をこわす外来生物だと知ってもらうことも大切です。

かいぼりによる防除

「かいぼり」とは池や井戸などの水を抜いて、底をかわかすことです。池の底にたまった泥を日光にあてることで、水を戻した後に水質が良くなります。昔から水質改善を目的として農業用に行われてきましたが、最近では公園の池などで外来生物を防除するために行われることも多くなりました。漁やわなでの捕獲は外来生物が増えることとの競争であり、なかなか解決できませんが、かいぼりによって水を抜けば、一気に防除を進めることができます。水が減ったところで生きものをすべて捕まえ、在来生物と外来生物に仕分けし、避難させておいた在来生物だけを水を入れた池に戻します。(→事例は116ページ)



アメリカ合衆国でもザリガニは人気の食材で、とくに南部で好まれています。写真は空軍が開いたフェスティバルの様子。こちらはアメリカザリガニを材料に、ソーセージやレモンとゆで、食べる料理です。

【出典】 書名 / 出版社名 / 出版年 / 掲載ページ
『学研の図鑑 LIVE 外来生物』/学研/2022年/26P,29P
『外来生物のひみつ』/PHP研究所/2018年/40P
『危険生物・外来生物大図鑑』/あかね書房/2017年/68P

『外来生物はなぜこわい?③』/ミネルヴァ書房/2018年/11P
『ずかん海外を侵略する日本&世界の生き物』/技術評論社/2017年/50P
『外来生物ずかん』/ほるぷ出版/2018年/79P

アカミミガメとアメリカザリガニは、2023年6月1日より「条件付特定外来生物」に指定されます。

- ① 規制開始後も、一般家庭でペットとして飼育しているアカミミガメ・アメリカザリガニは、これまで通り飼うことができます。申請や許可、届出等の手続きは不要です。アカミミガメ・アメリカザリガニが寿命を迎えるまで大切に飼育してください。
- ② アカミミガメ・アメリカザリガニを池や川などの野外に放したり、逃がしたりすることは法律で禁止されます。違反すると罰則・罰金の対象となります。適切な飼育を行わずにカメやザリガニが自力で逃げ出した場合も違法となることがあります。逃げ出さないような容器で適切に飼育してください。
- ③ 飼い続けることができなくなった場合は、友人・知人・個体の新しい飼い主探しをしている団体等に譲渡してください。この場合も、無償(譲り渡す側が引き取り料等を払って引き取ってもらう場合も含む)であれば申請や許可、届出等の手続きは不要ですが、責任をもって飼うことのできる相手を探して下さい。ただし、無償であっても頒布にあたる行為は規制されます。

アカミミガメとアメリカザリガニを「条件付特定外来生物」に指定する理由

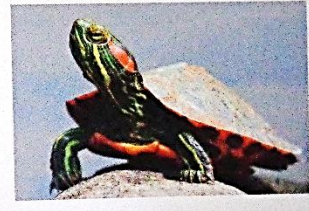
- アカミミガメは全国各地に定着し、日光浴の場所や食物などをめぐって在来カメ類との間で競合が生じ、在来カメ類に影響を及ぼします。また、食性が多岐にわたるため、在来生物群集に大きな影響を与えると考えられています。
- アメリカザリガニは日本全国に広く定着し、水生植物を消失させたり水生昆虫の局所的な絶滅を引き起こしています。また、ザリガニペストや白斑病などを保菌し、ニホンザリガニを含む在来甲殻類に大きな影響を与える可能性があります。
- 単に特定外来生物に指定して飼育等を禁止すると、手続きが面倒などの理由で野外へ放す飼育者が増える予想され、かえって生態系等への被害を生じるおそれがあります。そのため、一部の規制を適用除外とする「条件付特定外来生物(通称)」に指定することとなりました。

B アカミミガメ



ペットとして輸入逃げたり放された

アカミミガメの輸入は、1950年代にはじまりました。それまでの「銭亀(ニホンイシガメの子)」にかわり、「ミドリガメ」の飼育が全国的に広がり、一時は年間100万びきも輸入されました。大きくなると性質があらくなり、色もきたなくなります。そのため、野外に放たれたりしたもの定着しました。繁殖するようになったのは、1960年代からです。



大きくなりすぎて捨てられる

ミドリガメというのは、ミシシippアカミミガメの子ガメ(幼体)の商品名です。甲羅の長さ3cm、体重8g程度と小さく、なんでもよく食べ、水のよごれにも強く飼いやすいことから、1970年代には子どもたちに人気のペットとなりました。

しかし、飼育に成長すると、1年ちよつとで甲羅の長さが3倍以上、体重は30倍近くまで大きくなります。そして、大きなメスは甲羅の長さ28cm、体重2kgにもなり、最長30年も生きるのです。これくらい大きくなると、水槽もかなり大きいものが必要で、一般の家庭で飼うのがむずかしくなります。

ほかに、カメが長生きして、飼っていた子どもが大人になると興味をなくしてしまうなどの理由で、捨てられてしまう例があると抱えきれません。



ミドリガメは、緑目のカメすくいやペットショップで大人気だった。



わなでとらえる

水辺にえさを入れた箱わなを多数しかけ、おびき寄せることでつかまえます。浮き島型の上陸地になるわなも開発されています。また、子ガメは物かげにかくれていることが多いので、たも網をつかってすくってつかまえます。

メモ 中国ではアカミミガメを食べています。

【出典】 書名 / 出版社名 / 出版年 / 掲載ページ
『学研の図鑑 LIVE 外来生物』/学研/2022年/58P
『ビジュアルデータブック日本の生き物』/学研プラス/2021年/46P
『外来生物はなぜこわい?③』/ミネルヴァ書房/2018年/16P
『ずかん海外を侵略する日本&世界の生き物』/技術評論社/2017年/112P



【出典】 サイト名 / ページ名 / アクセス年月日 / URL
環境省 自然環境局/日本の外来種対策/2023.6.2/
<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/regulation/jokentsuki.html>

アカミミガメ

(カメ目ヌマガメ科)

Trachemys scripta

●甲長約28cm ●北アメリカ南部

●ほぼ日本全国;ヨーロッパ、オーストラリア、中国など全世界 ●緊急対策外来種 ★在来のカメのすみかや食物をうばい、繁殖を妨害する。在来の水生生物や、ハス、ヒシなどの水生植物を食害する。